晩翠舎の松の大木に鍋のふた下がる

宮田の三好退蔵さん（※1）の、広大な屋敷には、小学校を卒業した、男子の学生達を、教育する塾がありました。先生は、当時の漢学者城勇雄先生（※2）を頭に、数名おられました。

ところで、邸宅の石垣のところには、松の木があって、道路の上まで大きな枝がのび、昼でも暗い程繁っていました。夜になると、女子どもなどは、この大松の下を通る者は、1人もいませんでした。ことに夜更けになると、”鍋のふた“（化け物の俗称）が、下がるといって、一層さみしい所とされていました。

もちろんこの怪しい化け物は、乱暴ざかりの若い者達であり、晩翠舎（※3）の塾生のいたずらだったのです。

ある晩のことです。塾生の数人が、夜もシンシンと更ける頃、この松の木にのぼり、1本の蛇の目傘を、ひもでつるし下げて、下を通る人を、おどかしていました。ところが、大変りりしくたくましい武士が通りかゝり松の木の下まで来ると、気合もろとも、目にも止まらぬ早業で、つるされていた傘をつかみとり、取り上げてしまいました。

松の木の上にいた塾生は大変驚いて、すぐさま松の木から飛びおりて、その武士に向かって、頼みました。

「このかさは、私のかかさまのもので、大変大事にしているものです。どうぞ、こらえて下さい。」

と、膝を折って頼みました。その武士は、傘を返して塾生達にいいました。

「貴様達は、将来の高鍋を背負って、いかねばならないのだ。そういう者が、この様な始末では、心配でならん。よくよく反省して、勉学に励め。」

と、言い渡し、静かな足どりで、去っていったということです。

その後は、この怪しい化け物は現われなくなり、のどかな所になったということです。

うらへ

※1 高鍋町の先賢の一人 大審院院長、東京弁護士会会長　※2 高鍋町の先賢の一人 藩校明倫堂教授　※3 田村義勝の漢学塾の名前。三好退蔵の元屋敷を利用していた。

尚、この晩翠舎の塾生に、上町の綾部金作という、名物男がおられました。いつも大きなステッキを持っていて、道を歩きながら詩吟を吟じたり、筏橋の上でしばしば、独り剣舞をするなどして、気勢を上げておられるのが、見られました。

後に、日本の味噌をたくさんもってアメリカに渡り、貧しい人達を相手に、バターの代用として、味噌を使用させましたが、金作氏のこの構想は大成功だったということです。

しかしながら、氏のその後については、残念ながら不明です。

（採話：宮田地区　石丸恵守）

昭和61年8月発行　たかなべむかしばなし第1集

不思議な石ころ

正祐寺はお染ヶ丘台地に上る途中の、傾斜地一帯の山地に点在しています。

正祐寺には昔、2か所のお寺がありましたが、その1つは大寺（オデラ）で海岸に近いところで、大寺の住職の墓石が山の中にたくさん建立（こんりゅう）されていて、昔の面影を残しています。

もう1つは、正祐寺公民館のある地域に寺がありました。ここの付近にも墓石が山の中に散在しています。お染ヶ丘台地は昔、山が多く、川南町・都農町へと広い台地（現在耕地）になっています。この台地には無数の「塚」が散在していますが、持田古墳の一部になっています。

鴫野平地より、お染ヶ丘台地に上る坂には、深川坂、大寺坂、鴫野坂、正祐寺坂、蛸ノ口坂がありましたが、その中で正祐寺坂は中央にあって、人通りが最も多かったのです。そして、その坂の途中には大きい石が祀（まつ）ってありました。昔の人々はその石ころの前を通る時は、草履（ぞうり）を脱いで両手をつき、拝んでから坂を上っていったということが伝えられています。

大正時代の頃の出来事ですが、その石ころを誰かが移動したことがありました。ところが、移動した近くに家があって、丁度家の入り口の所だったので、家の人は邪魔になると思いながら、何時も通っていました。

それからしばらくたった頃、その家に病人がでました。色々と手当をしましたが、なかなか治らないのです。そこで思案のあげく、祈祷（きとう）師のところへ行って、訳を話しながらどうしたものかと頼みました。

祈祷師は神様を拝み、しばらく考えていましたが、その家の人に言いました。

「貴方の家の入り口に大きな石があるだろう、それがさわっている。それで、その石ころを元のところへ安置して、お祀りするがよい」と教えてくれました。

その人は早速、元の場所に運んで安置して丁寧にお祀りをし、更に岩岡保吉さん（※）に「石の仏像」を彫ってもらって、石の傍らに建立して霊を慰めました。すると、病人はだんだん良くなって元の元気な体になりました。

その石ころは現在も坂の所に安置してあり、石ころの傍らに石仏像が建立されています。

（採話：正祐寺地区　甲山勝代）

昭和63年1月発行　たかなべむかしばなし第2集

※高鍋大師開山者

正月行事

〈師走〉

一、すす払い

12月30日は事初めといって、正月を迎える準備を始める日とされている。

この日は、古くからすす払いをして家中を掃き清める。新年を迎えるには先ず清潔な住まいからという。

二、冬至（12月21日前後）

古くから当日は早くから風呂を沸しユズ（10～20個位）を入れ、ユズの香りただよう中に心を洗い清め新玉の年（あらたま）（※）を迎える心がまえとした。

※年月の「魂が改まる」という意味

三、門松

12月28日頃から12月30日まで各軒の門柱に若竹、松、梅、ウラジロ、ユズリ葉等を〆縄でくくり門松を立てて正月を迎える。

四、餅つき

4人1組となり早朝（5時頃）から始め夜の10時頃までその日に予約して家々に餅つきを始める。

（1日に約10軒から～15軒くらいを単位としていた）

（採話：手塚貞夫）

平成6年3月発行　たかなべ風俗・風習

令和5年12月22日発行　発行　高鍋町教育委員会　社会教育課　高鍋町大字上江8335番地2　TEL 0983-23-3326

デザイン・イラスト：ごとうきよ